

大学で実施されている入試研究の実態調査

林 篤裕、伊藤 圭、田栗 正章
(大学入試センター 研究開発部)

1 はじめに

国公立大学の志願者を対象とした共通試験として 1979 年にスタートした「共通第 1 次学力試験」は、1990 年にはいわゆる「アラカルト方式」への変更が加えられ、私立大学も利用可能となった「大学入試センター試験」として衣替えし、現在までに延べで 29 回実施されてきた。

この間、入学者選抜方法に関連する研究(入試研究)を行う組織として、「国立大学入学者選抜研究連絡協議会(旧入研協)」が結成され、追跡調査や受験者・合格者の特性分析、AO 入試の事例紹介等の情報交換を行なう場として活用されてきた。その後、国立大学の法人化等の変化を受けて、昨年度からは「全国大学入学者選抜研究連絡協議会(新入研協)」と名称を変更し、センター試験利用大学に限定せずに、広く全国の国公私立大学や短期大学も参加する組織として、再編成された。

近年では多様な入試の一つとして AO 入試が導入されると共に、その統括部局としてアドミッションセンターが開設され、専任の教員を配置している大学も少なくない。「大学全入時代」を迎え、大学の業務の中でも入試は今後益々その重要性を増していくと考えられる。しかし、入試研究という秘匿性が高く、業務にも直結した活動や研究はなかなか公表がためられ、実態が判りにくいと言う特殊な面を有しているのも事実である。このため、これらを組織的・体系的に実施している機関・部局もあまり知られていない。

このような状況に鑑み、新入研協の企画委員会と大学入試センター研究開発部では共同して「各大学で行われている入試研究の実態調査」を実施し、大学における入試研究活動の現状を把握することにした。本調査を通して、今後の大学入試改善に少しでも貢献できる資料が作成できればと考えている。

2 調査の概要と調査方法、回収率

各大学で実施されている入試研究を把握するために、表 1 に示すような 4 つのパートからなる調査票を設計した。Part A は、この調査の一番のメインとなる部分で、学内で実施している入試研究について聞いている。その際に実施時期による変遷を見られるように、現在実施している研究(A1)以外に、過去に実施された研究(A2)、もしくは将来に予定している研究(A3)についても、実施時期を分けて回答してもらう。これらは自由記述形式で記入してもらうものの、回答者の便宜を図るために別紙としてキーワードリスト(付録 A)を添付し、リストに掲載された研究を記入する場合は、その番号を書いてもらうだけで良いようにした。Part B では学内に入試研究を担当する組織があるかどうかを聞いており、組織がある場合はその名称や構成員、選任方法についても回答してもらう。Part C ではアドミッションセンターに類する部局を設置しているかどうかを聞いており、部局がある場合はその名称や構成員についても回答してもらう。Part Z は大学名や連絡先と言った大学の属性を記入してもらう。

調査対象は全ての国公私立大学 712 校(2006 年 9 月時点。大学院大学は除く。)とし、各

表 1 調査票の構成

(1) Part A : 学内で実施されている入試研究について
A1. 現在、実施している入試研究
A2. 過去に、実施していた入試研究
A3. 今後、実施計画のある入試研究
(2) Part B : 入試研究を担当する組織
B1. 入試研究を統括する学内組織や委員会の有無
B2. 学内組織の名称
B3. 学内組織の構成人数や構成員
B4. 学内組織の構成員の選任方法や任期
(3) Part C : アドミッションセンター
C1. アドミッションセンターに類する部局の有無
C2. 部局の名称
C3. 部局の構成人数や構成員
(4) Part Z : フェースシート: 大学名、連絡先等

表 2 回収数と回答率

設置者	回収数	設置数	回収率
国立大学	68	83	82%
公立大学	50	74	68%
私立大学	234	555	42%
計	352	712	49%

大学の入試担当部署を通じての郵送調査方式で実施した。2006年9月中旬～11月中旬の2ヶ月間の回収期間に、352大学から回答を得た(回収率約5割)。大学設置者別の回収率は表2の通りである。回収された調査票は電子化とスクリーニングを行い、そのデータを用いて分析を行った。

3 分析結果

3.1 入試研究

まず、Part A の過去(A2)、現在(A1)、未来(A3)の3つの項目のそれぞれの欄に、入試研究の記入が有るか無いかを調べ、その頻度と割合、および設置者別の頻度を集計した(表3)。また、3つの項目への記入有無で生成される8通りのパターンの頻度と割合、および設置者別の頻度を集計した(表4)。これらを見ると、過去、現在、未来の3時点のそれぞれで入試研究を行なっている大学は4割未満であり、また、3時点の何れでも入試研究を行っていない大学が半数存在することも判る。旧入研協当初からの構成メンバーである国立・公立大学でも全く行っていない大学が少なくない。

次に Part A に記入された入試研究の全てについて、それらの研究内容を吟味した。大

表 3 入試研究の有無と頻度

		頻度 (割合)	国立	公立	私立
A2 (過去)	有	126 (36%)	49	7	70
	無	226 (64%)	19	43	164
A1 (現在)	有	138 (39%)	46	12	80
	無	214 (61%)	22	38	154
A3 (未来)	有	88 (25%)	28	8	52
	無	264 (75%)	40	42	182
計		352 (100%)	68	50	234

表 4 入試研究の有無パターンと頻度

A2 (過去)	A1 (現在)	A3 (未来)	頻度 (割合)	国立	公立	私立
有	有	有	57 (16%)	22	1	34
有	有	無	41 (12%)	16	4	21
有	無	有	6 (2%)	2	1	3
無	有	有	12 (3%)	2	2	8
有	無	無	22 (6%)	9	1	12
無	有	無	28 (8%)	6	5	17
無	無	有	13 (4%)	2	4	7
無	無	無	173 (49%)	9	32	132
計			352 (100%)	68	50	234

学の規模や過去の研究経験年数の違いにより、記載されている研究の数はまちまちであった。各大学で実施されている入試研究は独自のなものも多く、その分類には困難な部分もあったが、研究の一つ一つについて、付録 A に示したキーワードリストのいずれに該当するかを丹念に調べた。リストに記載のない新しい入試研究と判断された場合は、新たに項目を増設し、そのことが判るように 90 番台の枝番号を付与した。付録 A の左側に示した数字は、左から順に過去(A2)、現在(A1)、未来(A3)における入試研究の出現頻度である。なお、同じテーマを取り扱った研究を複数の学部・学科で実施している大学もあったが、ここではそれを 1 つとして数えた。つまり、頻度は当該の研究を実施している大学数を示すことになる。

3.2 入試研究を担当する学内組織やアドミッションセンター

Part B で聴取した入試研究を担当する組織や、Part C で聴取したアドミッションセンターについて、設置者別の集計結果を表 5 に、また、両者のクロス集計を表 6 に示す。表 5 から、学内組織は国立大学の方が設置率が高いが、アドミッションセンターは私立大学の方が設置率が高いことが判る。また表 6 から、アドミッションセンターの設置有無と入試研究の学内組織の有無は一概に関係があるわけではないことも判る。つまり、アドミッションセンターが入試研究を行なう組織になっているとは限らないようである。

表 5 設置者別の学内組織/アドミッションセンターの設置有無

		国立	公立	私立	計
学内組織	有	63 (93%)	18 (36%)	83 (35%)	164 (47%)
	無	5 (7%)	32 (64%)	151 (65%)	188 (53%)
アドミッションセンター	有	20 (29%)	3 (6%)	101 (43%)	124 (35%)
	無	48 (71%)	47 (94%)	133 (57%)	228 (65%)
計		68 (100%)	50 (100%)	234 (100%)	352 (100%)

表 6 学内組織とアドミッションセンターのクロス集計

		アドミッションセンター		計
		有	無	
学内組織	有	62 (18%) [20, 0,42]	102 (29%) [43,18,41]	164 (47%) [63,18,83]
	無	62 (18%) [0, 3,59]	126 (36%) [5,29,92]	188 (53%) [5,32,151]
計		124 (35%) [20, 3,101]	228 (65%) [48,47,133]	352 (100%) [68,50,234]

※下段カギ括弧内は設置者別数(国公立の順)

4. 考察

紙面の都合上、ここでは入試研究(Part A)についての考察を中心に行なう。大学の学部数や、研究組織の有無、研究経験年数等の違いから、付録 A に示した研究テーマの頻度の大小は単純には比較できないことに注意する必要がある。以下では、相対的に頻度の大きいいくつかのテーマの中から特徴的な研究テーマについてまとめておく。

1) 追跡調査、時系列的な成績間の関連: 5-(2), 5-(91), 5-(92), 5-(1)

入試研究の代表的なテーマは追跡調査であると言える。当初、追跡調査をひと括りにし

ていたのだが、その中でも取り扱うテーマが細分化されていることに気付き、それらを3つに分類した。選抜単位ごとの追跡調査の中でも、特に推薦入試やAO入試に対象者を絞った追跡調査が行われているのは、一般選抜とは異なった入試に対して注目度が高いためではないかと想像される。

また、追跡調査と言えるほど時点間を緻密に追わないまでも、入試成績と学内成績と言ったような、成績間の関連を分析するテーマの頻度も高い。

2) 属性分析: 4-(1), 4-(91), 4-(2), 4-(3)

追跡調査以外のもう一つの大きなテーマとして、受験者と入学者や、選抜形態別の比較等、学生の属性に着目して、それらの違いを明らかにする属性分析が挙げられる。合格者数の決定等に影響するためか、入学辞退者に注目しての分析も目立った。

3) 入試の広報: 7-(2)

「大学全入時代」を迎えるにあたって、どのようにして受験者/入学者を確保するかは大学にとって死活問題とも言える。その意味で、高校生に大学を知ってもらう活動が注目を浴び、近年はこのテーマを取り扱った研究が注目されているようである。

4) 高校調査書の評価方法: 2-(8)

出願時の必須の提出資料であり、近年拡大している推薦入試やAO入試を行なう際には特に重要な選抜資料となることから、古くて新しいテーマとも言える。加えて、昨年秋にはいわゆる「未履修問題」も発覚したことから、高校調査書の取り扱い方については今後とも注目されるテーマと考えられる。

5) 推薦入試、AO入試、AC入試、自己推薦入試: 3-(1), 3-(2)

大学入学者の内、半分以上を超える人数が一般入試以外の選抜単位で入学してきている現在、一般入試を対象とした研究だけでは完全には入学者の特性を把握することができなくなっている。これらの入学者数が増加している選抜単位に注目した入試研究が盛んになってきているのではないかと想像される。

6) 入学前教育: 5-(8)

入学予定者に勉強の習慣を持続させたり、基礎学力を確認する目的で入学前教育を導入している大学が増加している。これは、一般選抜よりも早い時期に合格が決定する前項の選抜単位の入学者の増加と関係があると考えられるので、今後も、入学前教育を取り扱った研究も増えていくのではないかと想像される。

7) その他

上記以外にも、学生の入学前後の意識に関するもの(5-(5), 5-(13))や、高大連携(7-(1))、出願動向(5-(7))、入試制度の改革(6-(3))等、いくつかのテーマが今後も注目されるのではないかとと思われる。

5. おわりに

今回の調査で、入試研究と言っても種々のテーマがあることや、一部集中しているテーマがあるものの、広範な研究が実施されていることが判った。今後は、設置者ごとの入試研究の違いを明確にし、また、構成員の特性に注目して学内組織やアドミッションセンターの特徴付けを行ない、より深い分析を行う予定である。

試験に関する諸問題を議論できる場として入研協があり、また、2003年には日本テスト学会も設立され活発な研究活動が行われている。今までは比較的非公開で活動してきた入試研究であったが、今後は入試にまつわる種々の話題に広く関心を持ってもらい、加えて、

大学人に限らず多くの方々に参加してもらって大学の抱える問題を広く共有し解決していければと考えている。本研究がその端緒になれば幸いである。

付録 A. 入試研究で取り扱われる事項のキーワードリストと頻度（調査項目 Part A）

頻度			
A2	A1	A3	
(過去)	(現在)	(未来)	
1. 大学入試センター試験・個別学力検査			
10	7	5	(1) 設問の難易度・識別力等の分析や評価(設問解答率分析図、誤答分析、GP分析等を含む)
3		3	(2) 教科・科目間の得点の関連性や相関
7	3	1	(3) 合否入替り率、共分散比
2			(4) 得点の変換(順位点、偏差値化、標準得点化等)
4		3	(5) 選択科目における得点調整
6	8	2	(91) 大学入試センター試験成績と個別学力検査成績との比較
8	7	1	(99) その他
2. 選抜方法			
	2		(1) 学科目試験
2	3	5	(2) 面接(個人面接、集団面接)
3	3	2	(3) 小論文
		3	(4) 実技試験
	1		(5) リスニングテスト
		1	(6) 総合試験
		1	(7) 適性検査
5	5	9	(8) 高校調査書の評価方法(点数化、学校間格差等を含む)
1	1		(9) 2段階選抜
			(10) 一芸入試
			(11) 客観式試験と記述式試験の比較、評価
3	3	4	(12) 評価尺度の多元化、複数化
		1	(13) 総合判定方式(最低必要得点、枠別判定等)
6	1	4	(14) 試験科目(科目試験、面接、小論文、実技試験、高校調査書等)の配点比率
5	7	3	(91) 募集方法の検討(入試日程・科目構成・定員等)
5	3	10	(92) 入試に課す教科・科目、試験時間(元 1-(6))
3			(93) センター試験の導入
3			(94) 試験実施(地方会場、マークシート方式への変更、受験資格の審査等)
9	5	9	(99) その他
3. 特別な入試			
7	6	5	(1) 推薦入試
9	10	12	(2) A0入試、AC入試、自己推薦入試
			(3) 受験機会の複数化
2			(4) 第2部(夜間コース)の入学者選抜
2	1		(5) 専門学科、総合学科卒業者のための入試
1		1	(6) 圏内卒業者のための入試
			(7) 帰国子女のための入試
	1		(8) 身体障害者のための入試
1	3		(9) 社会人特別選抜
4			(10) 編入学のための入試
			(11) 飛び入学者のための入試
3	2	1	(12) 外国人留学生のための入試
		1	(13) 追加合格、第2次募集
4	5	1	(91) 指定校推薦入試
1		3	(99) その他

付録 A. (つづき)

A2 A1 A3

4. 受験者、合格者等の属性

12	14	11	(1) 受験者(志願者)、合格者(入学者)の分析
5	7	2	(91) 入学辞退者の分析(1から分離)
19	16	10	(2) 選抜形態(前期、後期、推薦等)別の比較
9	13	3	(3) 男女別、出身都道府県別、現役/浪人別による比較
3	2		(4) 複数日程(前期/後期等)連続併願者の分析
			(5) 複数年連続受験者の分析
1	2	2	(6) 普通高校(普通科)/専門高校(専門科)/総合高校(総合学科)出身者の比較
3	4	2	(7) 学部、学科、専攻、コース等類型別の比較
	3	1	(8) 高校における教科・科目の履修、課外活動(ボランティア活動を含む)
			(9) 家庭環境や社会環境の影響
3	3	5	(99) その他

5. 高校教育・大学教育・大学生活

21	25	11	(1) 高校調査書、大学入試センター試験、個別学力検査、学内成績等の関連や分析
20	20	6	(2) 選抜単位ごとの入学から卒業までの追跡調査
11	8	2	(91) 推薦入学者・AO入試入学者を対象とした追跡調査
38	40	19	(92) 追跡調査全般(2や91に含まれないもの)
3	2	2	(3) 高校の履修教科・科目と入試の受験教科・科目、大学の科目選択の関連
7		2	(4) 転学部・転学科、留年・休学・退学・中退
4	7	4	(5) 大学進学時の進路意識(大学観、職業観等)、進路決定(高校の進路指導等)
			(6) 大学進学時の大学・学部・学科等の志望順位
8	12	4	(7) 出願動向、倍率(志願、受験倍率等を含む)
2	8	9	(8) 入学前教育
2	3	4	(9) リメディアル教育(高校での既習・未習別クラス編成等を含む)
		2	(10) 教養教育、教養課程、共通教育等
			(11) 外国語教育
		1	(12) 専門教育
9	6	9	(13) 入学後の意識(学習意欲・満足度等)
5	4	1	(14) 専門分野への適性と適応
7	5	2	(15) 卒業後の進路との関係(就職、大学院進学、各種国家試験、公務員試験等)
		2	(99) その他

6. 入試制度

1	2	6	(1) 入試教科・科目、出題範囲や出題形式
1	1	2	(2) 入学資格制度
3	6	9	(3) 入試制度の改革
			(4) 外国の大学入試
	2	1	(99) その他

7. その他

6	4	8	(1) 高大連携
9	12	9	(2) 入試の広報、募集広報、学外説明会、高校側等との懇談(試験科目・科目等を含む)
		1	(3) アドミッション・オフィス
1		1	(4) 入試実施組織
2	2	4	(5) 入試データの情報処理方法・システム
3	2	1	(91) アドミッション・ポリシー
5	8		(92) 入試問題の適切さの分析
		2	(93) 入学手続き
5	8	4	(99) その他

頻度合計

347 339 254